

短 報

アメリカンカウンシル夏季交換留学制度 ーヴィラノバ大学看護学部との交換研修記録ー

中島 薫¹⁾ 大久保暢子²⁾ 堀 成美³⁾ 五十嵐ゆかり⁴⁾
ジェフリー・ハフマン⁵⁾ 菱沼 典子⁶⁾ 堀内 成子⁷⁾

Record of a Nine-year Student Exchange Program between St. Luke's College of Nursing and Villanova University College of Nursing

Kaoru NAKAJIMA, BA¹⁾ Nobuko OKUBO, RN, PhD²⁾ Narumi HORI, MPH, M.Ed³⁾
Yukari IGARASHI, RN, CNM, PhD⁴⁾ Jeffrey HUFFMAN, M.S.Ed⁵⁾ Michiko HISHINUMA, RN, PhD⁶⁾
Shigeko HORIUCHI, RN, CNM, PhD⁷⁾

〔Abstract〕

Student exchange programs between St. Luke's College of Nursing in Tokyo, Japan and Villanova University College of Nursing in Pennsylvania, United States were held eight times from 2002 to 2010. Program participants were obliged to be a part of the future development of St. Luke's Medical Center, which consists of St. Luke's International Hospital and St. Luke's College of Nursing. They were also expected to understand the historical relationship between the Episcopal Church in the United States and St. Luke's Medical Center, and to become bridges between Japan and the U.S. Four Japanese students and four U.S. students joined the exchange program alternately with the financial and operative support of the American Council.

This exchange program provided the participants from St. Luke's College of Nursing with opportunities to observe the excellent nursing care practices in the U.S. as well as to recognize the positive aspects of nursing in Japan through the comparison of nursing practices in the two countries. By drawing on the feedback received from students who participated in the exchange program, it is hoped that St. Luke's College of Nursing will develop a new exchange program with an institution in North America through which participants can enrich their view of nursing in a different country.

〔Key words〕 student exchange program, United States, international exchange

〔要旨〕

2002年より2010年の9年間に計8回にわたり、聖路加看護大学とヴィラノバ大学看護学部間で学部学生を対象とした夏季交換プログラムが実施された。同研修参加者には、将来にわたって聖路加国際病院と聖路加看護大学の発展に貢献することが義務づけられ、また米国聖公会と聖路加の歴史的関係をよく理解し、日米の懸け橋と

-
- 1) 聖路加看護大学 教務部教務課 国際交流委員会 St. Luke's College of Nursing, Office of Academic Affairs, Committee on International Exchange
 - 2) 聖路加看護大学 基礎看護学 国際交流委員会 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing, Committee on International Exchange
 - 3) 聖路加看護大学 看護教育学 国際交流委員会 St. Luke's College of Nursing, Nursing Education, Committee on International Exchange
 - 4) 聖路加看護大学 母性看護学 国際交流委員会 St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Committee on International Exchange
 - 5) 聖路加看護大学 英語 国際交流委員会 St. Luke's College of Nursing, English, Committee on International Exchange
 - 6) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 - 7) 聖路加看護大学 母性看護学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery

2011年11月9日 受理

なることが期待されている。プログラム実施にあたり、資金面・運営面の両面においてアメリカンカウンシルの支援を受け、日米各4名の学生がプログラムに参加した。

本プログラムの実施により、本学学生においては、日米の看護比較を通じて、米国の優れた実践を認識するとともに、日本の看護の長所を発見する機会となった。

過去のプログラム参加者の声を生かし、北米地域で学部学生が看護の知見を得ることのできるプログラムの開発が望まれる。

〔キーワード〕 海外研修プログラム, 米国, 国際交流

I. はじめに

聖路加国際病院ならびに聖路加看護大学の創設者である Dr. トイスラーが、米国聖公会の信徒や米国市民から募った寄付金を運用・管理するため、米国聖公会内にアメリカンカウンシル（在米聖路加後援会）が設けられていた。この基金の運用益はすべて聖路加国際病院ならびに聖路加看護大学のために使われてきた。アメリカンカウンシルと連携して、派遣する人材やその研修プログラムを検討するために、聖路加国際病院と聖路加看護大学では共同でリエゾンコミッティを設けていた。この基金の運用益は、将来、聖路加国際病院・聖路加看護大学のリーダーとして活躍が期待される人材の育成に活用され、病院の職員・大学教職員を対象とした海外研修、米国医学生を対象とした病院研修等が実施され、また一部は図書館の資料購入に充てられてきた。

看護学生の海外研修については、2001年12月開催のリエゾンコミッティにおいて人事交流を目的とした米国の看護学生の受入計画が提案され、2002年2月開催のアメリカンカウンシルにおいて実施が承認された。また、2002年10月、聖路加国際病院創立100年の記念式典にアメリカンカウンシルのメンバーが来日し、創立者トイスラーの孫に当たる Dr. リングウォルトもあわせて来日された機会にアメリカンカウンシルとリエゾンコミッティの合同会議がもたれ、本学の学生を対象とした海外研修を本学から提案した。米国・ヴィラノバ大学看護学部のナンシー・シャーツ-ホプコ氏が本学の学生の受け入れの労を取り、本学はヴィラノバ大学看護学部の学生の受け入れを隔年で実施することとなった。

以後2002年から9年間にわたり、計8名の日米の学生がおおよそ1カ月の研修の機会を得てきたが、2009年にこの基金は米国聖公会から聖路加国際病院の管理下に変更され、運用益の減少により、現在は小規模な活用に留まらざるを得ない状況になった。この運営体制等の事情により2010年度を最後にプログラムの終了を迎えたことから、これまでの実績を取りまとめ以下に報告する。

II. ヴィラノバ大学との接点と交換留学の条件

現在アメリカンカウンシルのメンバーであるナンシー・シャーツ-ホプコ氏は、1984～1986年の3年間、本学で母性看護学の非常勤講師として勤務していた。1986年に米国に帰国し、アメリカンカウンシルのメンバーとなり、米国・ヴィラノバ大学看護学部の教員として着任、1989年に同大学のテニユア（終身在職権）を得、2003年より博士課程のプログラム責任者を務めている。ヴィラノバ大学はペンシルベニア州フィラデルフィア近郊にある1842年創立のキリスト教（カトリック）を基盤とする私立の総合大学である。

本学では、アメリカンカウンシルおよびリエゾンコミッティの承認のもと、聖路加国際病院看護部と協同しながら全学で受け入れをし、国際交流委員会が研修計画を立てて実施したのに対し、ヴィラノバ大学での受け入れは、シャーツ-ホプコ氏が個人的に同大と交渉し、研修計画を立てて実施された。2002年7月に本学でヴィラノバ大学からの海外研修生を受け入れ、以後9年間にわたり本学とヴィラノバ大学間で学部生の短期交換研修プログラムを行ってきた。

1名の研修にかかる経費は約7,000米ドル（2009・2010年は予算措置の都合上4,000米ドル）であり、渡航費、生活費、研修に要する費用等、小遣いを除くすべての経費が認められていた。

研修生は、研修終了後英文でのレポートをアメリカンカウンシルおよびリエゾンコミッティに提出すること、また将来にわたって聖路加国際病院と聖路加看護大学の発展に貢献することが義務づけられ、また米国聖公会と聖路加の歴史的關係をよく理解し、日米の懸け橋となることが期待されている。

Ⅲ. ヴィラノバ大学からの海外研修生受け入れプログラム

1. 参加者選考方法

ヴィラノバ大学看護学部生で、次学期に4年生への進級を控える3年生を選考対象とし、GPA、課外活動実績、受賞・表彰経歴等を総合的に判断の上、シャーツ-ホプコ氏から候補者1名が推薦された。候補者はアメリカンカウンシル及びリエゾンコミッティでの審議を経て参加の承認を得た。

2. 実施日程

受け入れプログラムと派遣プログラムを隔年で実施したため、受け入れプログラムの実施日程は以下の通りである。

- ・2002年度 7月6日～8月3日(29日間・学部3年生1名受け入れ)
- ・2005年度 7月3日～8月1日(30日間・学部3年生1名受け入れ)
- ・2007年度 7月1日～7月28日(28日間・学部3年生1名受け入れ)
- ・2009年度 6月28日～7月25日(28日間・学部3年生1名受け入れ)

3. プログラム内容

受け入れ年度によりプログラム内容が異なるが、概ね表1の内容構成で実施された。

表1 ヴィラノバ大学からの海外研修生受け入れプログラム内容

大学	歓迎会・送別会、特別講義(日本の医療制度・小児看護・母性看護・教育看護・生活習慣統計)、学部生授業参加(国際看護・看護援助論Ⅲ・英語・異文化コミュニケーション・体育)、看護実践開発研究センター事業見学、ホームステイ(本学ボランティア学生宅、2泊3日)
医療施設等	聖路加国際病院、日本看護協会、中央区保健所、埼玉県秩父郡小鹿野町保健福祉センター、都内助産所、都内高齢者デイケア施設等

滞在中は本学に宿泊施設がないため、病院寮に宿泊した。

上記プログラムに加え、本学学生ボランティアの協力のもと実施された都内観光や学生企画イベントを通じて、学生間の交流を図った。

Ⅳ. ヴィラノバ大学への海外研修生派遣プログラム

1. 参加者選考方法

本学看護学部生で、派遣年度に3・4年生に在籍する学生を選考対象とし、学業成績、英語力(TOEFL, TOEIC, 英検等)、志望動機についての英文エッセイに基づき書類選考を行い、一次選考合格者に対して日本語と英語による面接試験を実施の上、候補者1名を選定した。候補者はリエゾンコミッティでの審議を経て参加の承認を得た。

2. 実施日程

2002年度に受け入れプログラムを実施した後、翌年の2003年度に本学からヴィラノバ大学へ研修生を派遣する予定としていたが、同年、米国の対イラク戦争開戦による国際情勢の悪化を受け実施を見送った。翌年の2004年度に派遣を開始し、プログラム終了年となる2010年までに4名の学生を派遣した。

- ・2004年度 8月1日～8月29日(29日間・学部3年生1名派遣)
- ・2006年度 7月23日～8月19日(28日間・学部4年生1名派遣)
- ・2008年度 8月2日～8月31日(30日間・学部3年生1名派遣)
- ・2010年度 8月2日～8月23日(22日間・学部3年生1名派遣)

3. プログラム内容

派遣学生の関心が米国での臨床活動見学であったため、複数の病院での見学実習を中心に表2のスケジュールが組まれた。

表2 ヴィラノバ大学への海外派遣プログラム内容

大学	看護学生の病院実習見学、学士課程講義見学(BSNExpress Class)、日本語・日本文化クラス見学
医療施設等	見学実習先: Delaware County Memorial Hospital, Hospital of the University of Pennsylvania, Bryn Mawr Mother-Baby Unit, Bryn Mawr Terrace, The Children's Hospital of Philadelphia, Lankenau Hospital 実施内容: 訪問看護・ホスピス看護師シャドーイング、病院産科病棟・婦人科外来助産師シャドーイング、集中治療保育室ナースプラクティショナーシャドーイング、地域医療ボランティア活動見学

(滞在中はホストファミリー宅に宿泊)

週末にはシャーツーホプコ氏の協力によりワシントンDCとニューヨークを観光し、ニューヨーク訪問の際は、アメリカンカウンスルメンバーとの会食が持たれた。また、滞在先のホストファミリー宅で米国の生活文化に触れ、日米の生活様式を比較する機会を得た。

V. プログラムの成果：本学学生にもたらされたもの

1. 異文化への関心の喚起

開発途上国での支援活動や海外の臨床の場で活躍する卒業生を多く輩出する本学では、将来のキャリアにおいて海外と接点をもつことを希望する学生も少なくない。2002年に初めて受け入れプログラムを実施した際、米国学生をサポートするボランティアを募ったところ、20名以上の学生から申し出があった。学生ボランティアによる受け入れ学生支援は継続的に発展し、その後、学生国際交流委員会として組織化された。学生の交流企画ではボランティア（または学生委員）として登録する学生に限らず、本学の学生が広く参加でき、留学生との交流を通じて異文化に触れる好機となっている。

2. 日本の看護への視点

派遣学生の多くは「看護先進国米国に対する憧憬」を抱きプログラムに参加している。現地で臨床見学を重ね、看護師の労働環境、医療の提供体制、健康保険制度を中心に日米比較を行い、多様な労働シフトのあり方、多職種にわたる医療専門職者間のスムーズな連携体制、患者の宗教・民族に対応したケア提供などにおいて、期待通り米国の優れた取り組みを認めている（表3）。一方で、日本の国民皆保険の利点や、日本の看護ケアの丁寧できめ細かな点を長所として認識しており、単純に米国のあり方を模倣するのではなく、各国の歴史的背景や文化の相違点を踏まえた上で、よりよい看護を追求する必要があるとの結論に至っている。結果として、米国を比較対象に得ることで、日本の看護のあり方を客観的に見つめ直す機会となった。

派遣学生の帰国後、学内で報告会を持ち、本プログラムで派遣学生が得た見聞を多くの学生と共有している。

3. 看護職の魅力の再発見

帰国後の報告書において、日米の看護職比較を通じ、環境や文化の相違を超えた看護の本質への言及がたびたび見受けられた。ある学生は「私は看護が対象を全人的に捉えることが特徴であることを再確認し、看護職が患者をアセスメントすることに最も適した医療職者であることを学んだ。この経験は私の看護に対するモチベーションを高めることにつながった」と述べている。

表3 ヴィラノバ大学への海外派遣プログラム報告書概要

2004年度	在院日数が短い中での看護師とのコミュニケーション、多職種間での情報の共有について、患者・家族へのがん告知とケア(小児がんを中心として)、複雑な保健制度、リスクマネジメントについて、看護師のレベルアップ制度(クリニカルラダー)
2006年度	看護師の労働環境・他職種との情報交換の方法、アメリカの健康保険制度の抱える問題とその対応、アメリカの在宅医療、インフォームド・コンセント:患者の意思決定、アメリカで行われている代替医療、授業・実習で感じた日本との相違点、文化の違いが看護に与える影響
2008年度	日本とアメリカの医療の違い:文化の違いに起因するもの、健康保険に起因するもの、アメリカでは学問として確立し浸透する異文化看護
2010年度	看護学生の積極的な姿勢と有益な教育、臨床重視の教育、看護師への期待度の高さ、形式ばらない人間関係とストレスの少ない職場環境、健康保険の不便さ、Medicaidの落とし穴と貴重な団体、自己表現の方法(ユニフォーム)、プライバシーの尊重、アメリカ医療に対する固定観念、高度な看護教育、よりよい職場環境、看護師と患者の衝突、アメリカにおける医療保険制度の長所と短所

4. 語学力向上へのモチベーション

派遣プログラムについて、参加学生はリエゾンコミティの規程に基づきTOEFL540以上のスコアを示す必要があった。2010年度の派遣学生は、入学当初より本プログラムへの応募を目指してTOEFLの受験を重ねた末、応募要件を満たすスコアを取得しており、プログラムの存在が英語の研鑽を動機づけたことを示している。

VI プログラム終了を迎えて

ヴィラノバ大学との交換研修プログラムは、学部学生にとって米国の学生と交流し、また米国での看護のあり方を見聞する唯一の機会であったため、学生から終了を惜しむ声が多く寄せられている。ヴィラノバ大学交換研修プログラムの成果を踏まえ、北米地域で学部学生が看護の知見を得ることのできる新たなプログラムの開発が本学の喫緊の課題である。

学生交換プログラムを継続的に実施するためには、双方の機関の安定的なパートナーシップが不可欠であり、相互互惠の協力関係を前提とした大学間協定の締結が望ましい。プログラム運営上の問題として、本学では学生寮などの宿泊施設を附置しておらず、現在実施しているタイ及び韓国からの交換研修生受け入れプログラムでは宿泊先として近隣のホテルを利用しているため、宿泊費用が高額にのぼっている。交換プログラムを成立させる

ためには、本学が受け入れ学生の宿泊費を引き受ける必要があり、大学の財政上の負担が大きい。宿舍の問題を含め、交換留学プログラムの実施は、運営資金の確保が前提となる。

今後、これらの課題の解決に取り組み、Dr. トイスラーの理念のもと、日米の懸け橋となる人材、本学および聖路加国際病院のリーダーとなる人材の育成を見据えた海外研修制度の再構築に臨みたい。

謝 辞

アメリカンカウンシルの基金により、日米8名の看護学生が多文化を経験する機会を得た。また、ヴィラノバ大学への派遣プログラムにおいては、ナンシー・シャーツーホプロ氏の多大な尽力により充実したプログラムが企画・運営されたことに深い謝意を表したい。あわせて、本学での受け入れプログラム運営に協力頂いた関係各位に感謝の意を表する。